

◆◆◆公教育は家庭教育に◆◆◆
◆◆◆どこまで関与するか(5)◆◆◆

本当の連携が 始まるためには…

田代 和美

難しいテーマを与えられたものだ。一体何を書いてよいのか分からない。どこまで関与するかと言われて、ここまですと線が引けるような類のものだとも思えない。

かたや幼稚園教育指導資料の「家庭との連携を図るために」を紐といてみると、幼稚園は幼児にとって、教師との信頼関係を基盤にしなから、遊びを中心として友達と楽しく集団生活を送る場であり、充実した集団生活を展開することにより、幼児は生涯にわたる心身の健やかな発達の基盤となる様々な力を培っていく。一方、家庭は家族から十分な愛情や思いやりを受けて安心して過ごせる心の基地であり、幼児は依存し安心して過ごせる家庭生活を通して、愛情や思いやりの大切さ、生活していく上で必要とされる基本的な生活習慣などを自然に身に付け、精神的にもまた生活習慣の上でも次第に自立へと向かっていく、という旨

が記されている。関与するというより、それぞれの役割の違いがここでは極めて明確に分けられている。

それぞれ役割が違うという明らかだが、そしてその異なる役割のどちらも重要であり、両方が車輪のようにうまく回っていくことが好ましいという明らかだが、しかし今、大きな課題となっているのはなぜだろうか。子どもにとって家庭も公教育もどちらも自分の生活であり、子どもを中心に考えればスムーズに事が運ぶように思われるのだが、大人という厄介な存在は、自分の身を守るために相手の領分を犯すということをおたかも子どものためというかのようにやっている。

幼稚園と保育園では、家庭との関係において、かなり趣を異にしているかもしれないが、ここでは保育園にお世話になってきた親の立場から、園

と家庭との連携について、自分の失敗から考えたい。

わが子が保育園に入園したのは二歳二か月の時であった。月齢も低く、身体も小さく、同じクラスの子どもにぶつかられるとふっ飛んでしまいそうだった。ひとつ下のクラスに入れたなら、その方がどんなによかったかと、四月で区切られる公教育の場を恨めしく思ったことを覚えている。

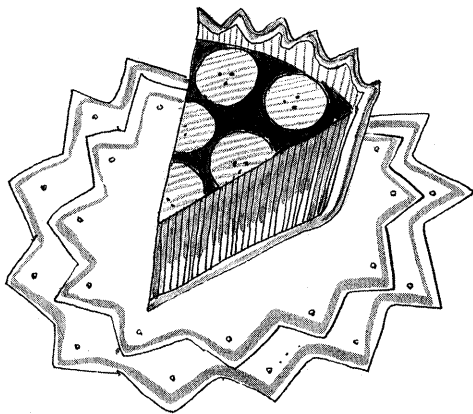
入園直後「靴を一人で履けないようなので、家で練習して下さい」と連絡ノートに書かれたことに始まり、あれこれひとりではできないことを書かれるにつけ、保育園はきついなあと心配になり始めた。靴が嫌いで、園庭で素足で遊ぶことや、集団の流れになかなかのらずに自分の思いで動くわが子は、「マイペースだから……」という表現で語られることが多かった。私には、子どものやり

たいことが見ていて分かるだけに、そしてそのマイペースさを大切に育てていきたいと思うから、なおのことその言葉が批判めいて聞こえて反感を覚えた。「お家と園との生活が余りに違うから……」「お家ではMちゃん中心に生活が動いているのはよく分かりますが、保育園というのはいやほいや集団だから……」と言われて、集団に馴染めなかつたり、登園を渋ることの責任を家庭に帰されたように感じたこともあった。何で集団、集団と二言めにはいるのだろうか。集団が先になんかあるわけがないと納得がいかない日々であった。保育参観の日がきて、みんなで一斉に与えられた製作やゲームをする保育にまたがっかりした。わが子は一斉に行う活動に加わらず見ていたり、周りの子どもたちがやることを見て、何をやっているのかが分かってようやくやり始めた頃にはもうおしまいになってしまっているということの連続

だった。二歳という年齢にはきつすぎると思われるような集団での遊びが多い園の様子を見て、無理やりやらせられないことがせめてもの救いだと自分に言い聞かせていた。そんな中で園には頼れないという気持ちになりつつも、わが子のことを分かってもらいたいという一心で連絡ノートに家での様子をたくさん書いたり、担任と話をする機会を持つように努めていた。おそらく、なんてうるさい親だろうと思われていたに違いない。

お昼寝に関しては最も深刻であった。三歳児になつてから昼寝の嫌いなわが子は、今までに増して登園を渋り出した。昼寝ができないことが常につながノートの話題になり、私は「今日は、お昼寝できた？」と聞くことが日課ようになっていった。夜遅く帰宅することの多い不規則な母親の仕事に振り回されて夜型の生活になり、朝はどうしても遅くなる。そのためにお昼ではまだ眠くな

い。それを常にごどこか後ろめたく思っているから、「小学校に行つてからは、早く起きなくてはならないんだから、今のうちに早起きの習慣をつけておいたほうが……」などといわれると、なんぞ早起きがそんなに大切なのか、なんでお昼寝をすることがそんなに大切なのか、逆らいたくなる気持ちも起こった。それでもお昼寝ができるようにと、眠くてぐずるわが子を朝早く起こしたりもしたが、でもそれでも寝る様子はなく、相当寝不足の状態で、ようやく昼寝をするようだった。じゃあ、昼寝ができるためには、寝不足にしておけばよいのか……。これでは本末転倒である。子どもにとっての昼寝ではなく、昼寝をすることそのものが目的になってしまっているではないか。何をやっているのだろうか、と情けなくなつた。でも、それもこれも保育園に何とかいやがらずに登園してほしいという気持ちからであつた。



毎日毎日「今日、保育園お休み?」「あと何個いったらお休み?」と聞かれる日々だった。お昼寝以外はコレがいやというはつきりしたものはないのだが、「保育園ばかりじゃいやなんだ。」と毎日のように言っていた。朝、なかなか

私から離れられなかったり、クラスで散歩に行く準備をしているところに登園して「いやだ。今日はお散歩いきたくない。保育園にいる。」と頑として聞き入れなかったりする事もあった。担任の先生からすれば、子どもの行動は母親の帰宅が遅い日が多く、ゆっくり過ぎず時間が足りないためとおそらくはそう思っていただろうし、本当のところそうだったのかも知れない。でも私からすれば、クラスの中にゆっくり好きなことに取り組めるような雰囲気のかなさを毎朝感じて、なんでわが子をここにおいて行かなければならないのかなどと思う気持ちを振り払うようにして出勤したり、迎えに行った時にいつも所在げにしているわが子を見て、さあこれから楽しく過ごそうねと心の中でそう語りかけたりしていた。

この頃の私は、担任の先生と何とか仲良くしたいと思いつつ、どこかに任せられないという思い

があった。朝、子どもが「おはようございまーす」と叫んでも、背を向けてオルガンの練習をしていて子どもに気づきもしなかったり、子どもの思いをしっかりと受け止めてくれないと感じることが多かったために、本当のところでは担任の先生を信頼していたとはいえなかった。実際には担任ともよく話をしたし、担任とクラスの親たちの橋渡し役のような立場に立っていたにもかかわらず、である。でも子どもが先生を好きなんだからと言いかせたり、先生の生活の大変さを理解しようとしたりして、そんなところで何とか自分の不信感に言い訳をしつつ、自分をごまかしながらつきあってきたのかも知れない。相手を責めても何の解決にもならないのだが、ごまかしながらつきあっても何の解決にもならない。

おそらく担任の先生もそして私自身も自分に対してどこかこれじゃあいけないと思いつつも今

の状況を自分を変えないという線を崩さなかったのだと思う。担任の先生は保育指針の改訂もあって、今までやってきた保育形態や方針を変える必要性をどこかに感じながら、それをするとな自分の生活が大変になると思って、それは変えずに、許容度を広げるあたりで妥協すると決めていたのだと思うし、私もそのころは夜遅くなる仕事を減らすことはできない、と自分を振り返る事なく、しかし相手に対してはもっとゆったりとした保育をして欲しいと思っていた。そんな中でいくら話をしたところで無駄だったのかも知れない。身辺自立や指示に従うことなどについての要求がきびしかったり、けんかを頭ごなしに叱ったりする辺りについて気になることが多かったのだが、そのような点に関しても「先々のことをいつも考えてしまうのは私の悪い癖ですが、でも来年四歳児クラス単数担任ということを考えて……」というよ

うに方針を変えるつもりのないことは分かっていた。それにしても公教育は、家庭教育にどこまで関与するかではなく、私の場合はその逆に、親という立場だけで園に行っていればよいものを、公教育の領分に随分と関与し過ぎてきたと反省する。何かを担任に相談されたりすると、自分の立場が不明瞭になって中途半端なかかわり方をしてしまっていた。親が保育の内容にまで関与するなんて、まさに不信感を表出していたようなものではないか。

四歳児クラスになって二、三日たった頃、新しい担任の先生は「お母さん、私たちすぐためさされてるのよ。どこまで甘えられるか、どこまでやったら怒られるかって。」とにこにこしながら私に言った。その直後、わが子はテーブルの上上がった。今までの二年間、やってはいけな

いと言われるようなことを園の中でしている姿を見たことがなかったので私はちょっと驚いた。先生はテーブルの上に乗ってはいけないことを伝えながらも、「高いところにのりたいんだよね」と子どもの気持ちを汲んでくれていた。でも、それまで園の中で叱られたことなど（おそらく）一度もなかったわが子は、ムッと怒りを露にして先生の手を振り払って逃げた。その態度にまた私は驚いた。自分が悪いのは当然分かっているのにもかかわらず、あんなにストレートに感情をむき出しにしたのを園の中で初めて見たからである。私と二人でしばらく過ごした後で子どもは先生の元に行った。謝っていたようだが、私のところに戻ってきたときにはこにこして「先生がね、明日登れるところ作ってくれるっていった」と言った。そして翌日、先生はその約束を守ってくれた。連絡ノートには「昨日はMちゃんの違う面が

見られてよかったと思います。子どもだって、おりこうばかりやっていられませんか。」と書いてあった。先生と子どもの距離は一気に縮まり、それは私にとっても同じであった。これはMが、園の中でも自分を出せると実感した初めての



出来事だったように思う。そして私が、園の中でわが子の内面に気づいてもらえたと実感できた初めての出来事だったように思う。

今、わが子は毎日喜んで保育園にいらっている。

行きたくない気持ちから「なんだかお腹が痛いみたい」と毎朝言っていたあの頃が嘘のようである。このところ、夜、布団を蹴飛ばして何も掛けずに寝ているために寝冷え気味で、本当に朝お腹が痛かったりするのだが、それでも「いくんだもん。先生とお友達とあそびたい」と言う。何日か家をあけて戻ってくると、まず「保育園いつてみよう。誰かいるかもしれない。」と言って保育園に直行する。そんな姿を見ていると、保育園楽しいんだな……とこちらも安心する。保育園が楽しいと思ってくれることで、自分がこんなにも安心していられるなんて今まで思わなかった。昼寝をしているかどうか、別に全体として睡眠が足り

ていて、元気でいればいいやと思えるようになって、担任の先生もお昼寝がいやだと言っている子どもが多いので「眠らなくてもいいから、静かに横になっていようね」といつてくれていることも知り、それでもまた安心した。

一つのことがかうまく回り始めると、ほかのことも相乗的にうまく回るようになる。問題は、その現象だけにとらわれればとられるほど、解決から遠ざかることを分かっている。自分やわが子がかかわる問題に関しては、なかなか解決の糸口が探せなかった。うまく回り始めたのは、何といても担任の先生への信頼からである。親にとっては、園での生活は把握しきれものではない。登園するときの子どもの様子や言葉だけでなく身体中で表現している楽しさから園の様子を把握している。その姿が担任への信頼につながる。また連絡ノートの言葉から感じられる暖かさのよ

うなものも信頼に関係していると思う。

公教育が家庭教育に関与するとしたら、わが家の場合は親に安心感を与えてくれていることだろう。私の把握できない、知らない時間を過ごしているわが子が、でもその時間を楽しく過ごしているという安心感。それがあって自分まで園に行くのにうきうきして、協力できることがあったらできる限りのことをしていきたいと思ってしまう……。親って（私って）なんて単純なんだろうと我ながら呆れるが、正直にそう思う。もちろんこの協力は、保育の自身に関与するなどということではない。子どもたちといろいろな植物の栽培をやってみたくらいで、家で余っている種などがあつたら持つてきてくださいというような事への協力や廃物を常に貯めておいて持つて行くというような類の事である。

担任を信頼できると実感してから、私自身、本

当に気持ちが悪くなった。いろいろなことを自分で抱え込んで、他人の領分まで自分で何とかしようと思つていたような気がなくなつた。私にはできないけれど、友達や園の生活の中で初めて経験できることがたくさんある。それをひしひしと感じるようになった。これが私の親としての自立の第一歩なのかもしれない。自分の領分、親としてできることの限界に気づき始めたときに、園に頼る部分が見えてきた。お互いを尊重するということとは、相手を信頼できて、そして自分にできることの限界を知つて、自分のなすべきことをしつかり果たしていくことなのだろう。これからようやく本当の連携が始まる予感がある。

（お茶の水女子大学）